

2015 年度学習院大学史学会例会

歴史の中の儀礼と権力―支配者権力の象徴機能と秩序形成―

◆開催要項

歴史の中の儀礼と権力―支配者権力の象徴機能と秩序形成―

2015 年 12 月 12 日（土）（入場無料・予約不要）

於 学習院大学西 5 号館 202 教室

趣旨説明（13 時 30 分～13 時 35 分）

第一部（13 時 35 分～14 時 20 分）：桃崎 有一郎 氏（高千穂大学商学部教授）

「北条氏権力の専制化と鎌倉幕府儀礼体系の再構築 ―得宗権力は将軍権力篡奪を志向したか―」

第二部（14 時 30 分～15 時 15 分）：岸 泰子 氏（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

「近世京都における朝儀の場の特性とその秩序 ―葬送を中心に―」

第三部（15 時 25 分～16 時 10 分）：小山 啓子 氏（神戸大学大学院人文学研究科准教授）

「国王儀礼にみる近世フランスの君主制秩序」

コメント（家永遵嗣教授・中野隆生教授）

質疑応答（16 時 20 分～17 時 50 分）

◆例会報告（文責：鶴川健友）

今年度の史学会例会では上記のように銘打ち、12/12（土）に桃崎有一郎氏、岸泰子氏、小山啓子氏ら三名の講師をお招きしてご講演頂いた後、本学の家永遵嗣教授と中野隆生教授よりコメントを頂戴しました（於 学習院大学西 5 号館 202 教室）。

第一部

講演 桃崎 有一郎 氏

「北条氏権力の専制化と鎌倉幕府儀礼体系の再構築 ―得宗権力は将軍権力篡奪を志向したか―」

現在、鎌倉幕府において得宗権力が「専制化」し、それが将軍権力を「篡奪」していくという流れは「得宗専制化」として一般に説明されている。今回、桃崎氏はこのような見方に疑問を呈し、「儀礼」の面から得宗家の将軍権力「篡奪」という事象について再検証された。

結論を言うと、得宗権力の強化の過程において、北条氏以外の有力御家人らは内乱と肅

清によって大幅に葬り去られることになった。それにより御家人の絶対数は減少し、得宗権力は幕府儀礼においてその分の経済的負担と人力的負担の双方を肩代わりせざるを得なくなったとされた。なぜそこまでして幕府儀礼の負担を背負っていたのかという点については、得宗が「公」の体现者、すなわち幕府そのものに自分を准えていた為であるとされた。つまり、得宗権力が施行した幕府体制は、「将軍・得宗という二者が「公」の体现者として並列した二頭体制」であり、それは将軍の存在が前提であり不可欠であった。よって、得宗権力は将軍権力の「篡奪」をそもそも志向していなかったことを結論付けられた。



第二部

講演 岸 泰子 氏（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

「近世京都における朝儀の場の特性とその秩序 ―葬送を中心に―」

本講演では近世天皇の葬送儀礼、特に葬列の場の特徴から、天皇・朝議がどのように表出するかといったことを検証された。とりわけ禁裏から皇室の菩提所である泉涌寺へ向かう葬列が通過するルートが主な分析対象であった。その葬列について近世では寺町通を通過するルートが取られていたが、後桃園天皇の葬列を最後に葬列が寺町通を通過せず、町中を通過するルートへ変更されていることについて指摘された。

寺町通は「天皇の葬送・穢に対応しうる（固定された）場」としての役割を持ち、葬送儀礼の場の荘厳さを保つ役割を果たすものである。しかし、都市における朝廷儀礼の場が広範に及んでいくとともに葬送儀礼の「場」もより広範になっていき、「拘束」する性格を有しながらも、祝祭性を利用した広い範囲の権威表出や、「見たい」という都市の民衆の欲求に対して「見せる」儀礼へと変化していくことを述べられ、こういった朝議が行われる場の変化によって権力や秩序が可視化されるという可能性を示された。



第三部

講演 小山 啓子 氏（神戸大学大学院人文学研究科准教授）

「国王儀礼にみる近世フランスの君主制秩序」

小山氏は、近世フランスにおいて国王儀礼と都市がどのような関係を結んでいたのかということを主題に据えられ、主に 1660 年のルイ 14 世による入市式を取り上げられた。入市式では国王側が自らの栄光を都市に知らせめ、都市側は既存の諸特権を新国王に認可させる(=都市と王権の「契約更新」)という役割を持っていた。

さらにその中で小山氏はこの入市式について、恩赦の授与・前王の課した税や罰金の免除などの交換行為も重要な要素であったが、ルイ 14 世の即位時に定められた即位記念税に吸収された点に注目され、行政実務と儀礼が次第に分化していく傾向を指摘された。

また、従来の式典との相違点にも触れられ、その中で「公共の安全」を守る王権が重視され、「正義」「公平さ」などといった従来重視されていた王権への理想像が後退していくことを述べられた。そして首都パリでは、入市式は「国王の事績を祝賀する機会」へ変遷していき、最終的に都市と王権の一体化が見られるようになると結論付けられた。



コメント

・家永 遵嗣 氏（本学教授）

家永教授は、岸・小山氏の講演内容が、儀礼をどのような場所でどのような人々に「見せる」のかという観点であることに注目された。岸氏の講演の中で、そういった「人」と「場」の関係が近世後期に変わってくることに触れられ、そこに参画している「人」と「場」がいかに融合し、またいかに変容していくのかといった問題を重要視された。

桃崎氏の講演については、儀礼がいかに権力との接点を持っているかを中心に考察したものとされ、現在論じられている朝幕関係（幕府が朝儀の経費を肩代わりするという関係）をそのまま北条氏と鎌倉幕府の関係に当てはめたものであり、整合性のとれたものであると評価された。

・中野 隆生 氏（本学教授）

中野教授は儀礼における宗教性と公共性（誰に見せるか）といった問題に対し、岸氏の講演においてそれが鮮明に現れるといったことを評価された。また、フランスにおける儀礼上の転換点を 1610 年に位置付け、それほど検討されていなかったこれ以降の儀礼に小山氏が焦点を当てたことに注目し、後に続く入市式は何なのかを具体的に検討したものであると評価された。

また、こういった入市式には国王と都市の相互関係が全面的に出てくることから、ルイ 14 世絶対王政の前年である 1660 年やそれ以降には都市と王のどちらに主導権があるのか、相互の関係性は専制期に変化していくのか、といった疑問を示された。



本例会を開催するにあたり、ご協力をいただきました桃崎先生、岸先生、小山先生及び司会・コメントを頂きました島田先生、中野先生、家永先生を始めとする本学先生方、例会関係者、参加者の皆様にはこの場を借りて厚くお礼申し上げます。